

社会運動史研究の最高峰！

社会運動

通信

全40卷

別冊1

●推薦―石堂清倫／大河内一男／小山弘健／塩田庄兵衛／渋谷定輔／鈴木裕子／松尾章一／渡部 徹
●別冊―解説（渡部 徹）・総目次／記事・地方別索引

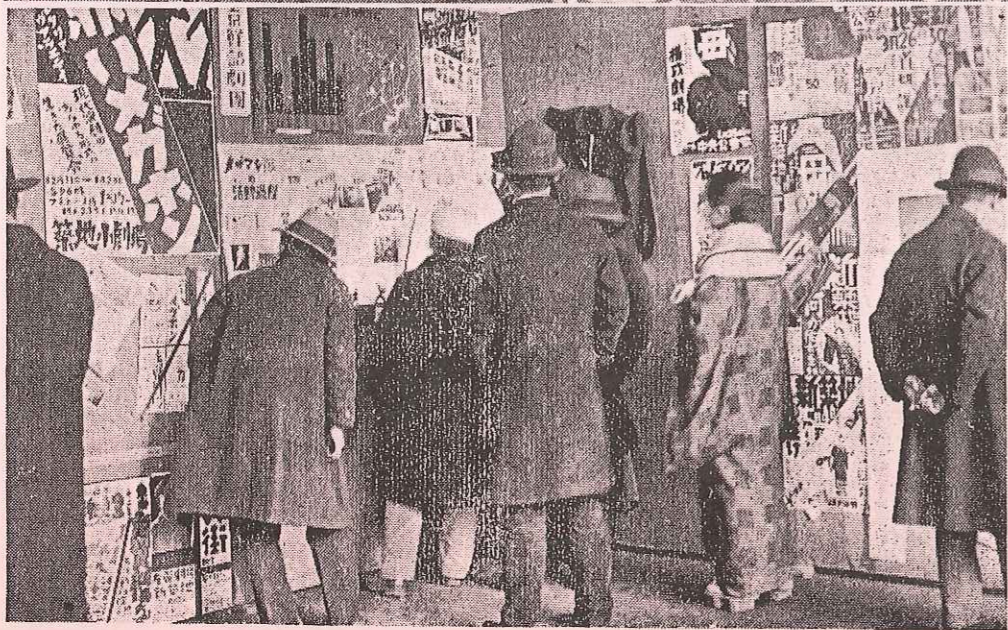
不二出版

社会運動史研究の最高峰！
昭和3年↓15年 復刻版



社会運動通信

昭和三年から昭和十五年までの十二年、日本の右翼団体が陸軍の圧力を背景に漸く社会運動の舞台にその黒い影をみせはじめ、多くのテロリズムが公然と行われた後、「大日本帝国」が満州に進出し日華事変が開始され大日本産業報国会が労働組合を呑みつくしてしまふ昭和十五年までの一貫した記録は、なにもものにも替え難い価値をもっている。ここにこの『社会運動通信』の二、六九八号、創刊から当局の圧力で廃刊のやむなきに追い込まれるまでの復刻が完成したことを心からよろこびたい。



上 目下抗争中の福助足袋会神戸工場労働組合役員部指部
中左 工場を襲く附子開助工場
中右 日本労働會館に於て商標登録を叫ぶ松岡一紙の陳氏
下 新報社之園に開演した日本プロレタリア演劇団演劇

昭和七年二月二十四日号表紙

げることせず、あくまで情報の提供に終始したことが、三〇年代の苛烈で陰湿な取締りのなかでよく存続することが出来た秘密だろう。『社会運動通信』は三〇年代における「大日本帝国」に対する庶民の抵抗の丹念な記録としてこの時代を知ろうとするものにとって欠かせない記録である。

もちろん『社会運動通信』が情報誌だと言っても、単なる無性格な報道ではなく、無産政党や労働組合やその他さまざまな形での庶民の抵抗の記録であり、しかも『社会運動通信』の尊重すべき資料価値は、当時の労働者大衆の闘争や庶民の抵抗が必ず「輝がやかしき勝利」に終わったという風な情報ではなかった点にある。この時代を通じて、労働組合や無産政党の機関紙・誌の記事が必ずしも真実を伝えていなかったのに比較すると、この『社会運動通信』の報道は良心的であったと言わなければならない。私はその頃いろいろな組合、政党の流した合法・非合法のガリ版刷りのレポートを読んでしたが、それはこの種の運動がどこまで自分の力量の真実を語っているかを秤量するためであった。声の大小は実力の大小とは別物だったからである。その点でこの『社会運動通信』は資料価値において優れていると言わなければならない。

昭和三年から昭和十五年までの十二年、日本の右翼団体が陸軍の圧力を背景に漸く社会運動の舞台にその黒い影をみせはじめ、多くのテロリズムが公然と行われた後、「大日本帝国」が満州に進出し日華事変が開始され大日本産業報国会が労働組合を呑みつくしてしまふ昭和十五年までの一貫した記録は、なにもものにも替え難い価値をもっている。ここにこの『社会運動通信』の二、六九八号、創刊から当局の圧力で廃刊のやむなきに追い込まれるまでの復刻が完成したことを心からよろこびたい。

旧内務省・旧司法省関係の文書類を越える価値

小山弘健・社会運動史研究者（95年死去）

こんにちは情報過剰の時代といわれ、洪水のような情報のなかから何をえらびだすかが問題とされるが、戦前は逆にかず少ない情報をどのように多く集めるかが問題だった。ことに社会運動・労働運動の出版分野では、戦前は記事差止めから発禁処分まで大へんな制約があり、そのうえ印刷物の頒布から入手まで「危険」がつきまとい続けた。一五年戦争がすすむにしたがって、運動関係の文書を持つていた「危険人物」とみなされたからだ。取締りや制約のない戦後からは「隔世の感」があり、昭和初頭からこの種の文書に接してきた私など、戦前戦後はまったく別個の社会であるかのような思いがする。

戦前の状況下で、運動上の日々の事件・組織・人物の動向などを丹念にあつめて、客観的に報じていた『社会運動通信』は、おそらく唯一・最高の全国的情報源だったといえる。東京や大阪の中心都市だけでなく各地の動きを多数に収録していた点で、最近復刻されている旧内務省・旧司法省の関係のぼう大な文書類も『社通』には及ばない。もちろん合法刊行物としての『社通』は、非合法・半非合法の運動分野の情報では限界がある。しかし、一般の具体的な運動状況を、そのときそのときの生きた情報として、しかも全国的な規模でとらえうるものは、『社通』以外にはない。当時、これだけ全国的な通信のシステムを、どうしてつくりあげたかのように維持していったのか、私にはいまだにふしぎである。

日中戦争の拡大とともに、いわゆる左翼文庫はほとんど店頭から姿を消し、たんなる運動の情報誌さえ入手がむづかしくなっていたから、この『社通』が昭和一五年九月まで刊行されていたことなど、私はいままで知らなかった。『社通』がほぼ完全に復刻されることは、戦前運動文庫の復刻事業のうえで文字どおり金字塔をうちたてるものであり、戦前運動史のこれからの研究に画期的な進歩をもたらすものであろう。

『社会運動通信』の復刻を喜ぶ 運動史研究の有益な資料

塩田庄兵衛・立命館大学文学部教授

これまで私が目にするのができた『社会運動通信』はごく限られている。発行者の性格もはつきりしない印象だったが、社会運動についての情報量の多い点に関心をもち、魅力を感じていた。

このたび不二出版社からの復刻版で、創刊から終刊までの大部分を見ることができるようになるという。適確な解説に手引きしてもらいながら利用すれば、運動史研究のうえで有益な資料となるのが期待される。いずれにせよ研究上の共有財産が豊かになることは歓迎すべきことだから、順調な刊行を望むものである。

どの市民的婦人運動についても要領よく報道し、特定の党派にかたよらずに、比較的、公平に伝えている。資料の散逸は、また、運動体の「顔」ともいべき機関誌(紙)にも及んでいる。幸い、社会民衆婦人同盟の機関誌(紙)であった「民衆婦人」は、大原社研に揃っているが、その他の、たとえば「働く同志」(社会大衆婦人同盟)や「婦人戦線」(国家社会婦人同盟)などは、容易にみる事ができない。「社通」は、これら機関誌の抜すいを掲載、紹介し、一つの手がかりを与えてくれる。

婦人運動史研究は、運動史研究の中でも遅れている分野である。その大きな原因の一つとして、資料の散逸があげられよう。今回の「社通」復刻は、婦人運動史研究に、系統的資料を提供してくれることになり、これを機にこの方面での飛躍的發展がのぞまれると思う。

日本人の苦渋にみちた 関いの貴重な証言

松尾章一 法政大学教授

主権在民・平和主義(戦争放棄)・個人の尊厳(基本的人権の保障)を三原則とする日本国憲法が施行されてから二十七年目を迎えた。中曽根内閣の出現によって、この日本国憲法は、無惨にも形骸化されつつある。議会制民主主義・政党内閣政治は、ふたたびファシズム体制へと変質しようとしている。

今日ほど大日本帝国憲法体制下で、どのような歴史をへて天皇制・軍部ファシズムが勝利したのかを、戦前の歴史から深く学ばなければならない時期はないだろう。大学や地域で、日本現代史を講義して、切実にそう思う。議

会制民主主義・政党内閣政治が、ファシズムによってかわられようとしていた時、議会・政党・労働組合・知識人、さらには国民大衆のさまざまな運動や意識がどうだったのか、なぜ十五年戦争に国民がまきこまれてしまったのか、を。このたび、不二出版から「社会運動通信」が復刻出版されることを知った時、思わず私は拍手喝采した。一九二八年五月七日に創刊され、一九四〇年九月十四日に廃刊させられた通称「社通」は、冒頭で書いた天皇制・軍部ファシズムが国家体制として完成された時代の、日本人の苦渋にみちた関いの貴重な証言である。これまでこの時期の歴史を研究する者にとって必読の基礎的史料集に、戦前に大原社会問題研究所の編集した「労働年鑑」が大変便利なものであった。しかしこの「年鑑」も、ほとんどがこの「社会運動通信」から採録したものであった。近年、権力側の史料として「社会運動の状況」、「思想調査」、「特高月報」等々、また法政大学大原社会問題研究所蔵の貴重な原史料や新聞・雑誌が續々と復刻刊行(法政大学出版局)されている。日本現代史の科学的研究は、いまやと本格的な研究の緒についたばかりである。

この「社会運動通信」の復刻は、日本社会運動史研究のみならず、日本現代史研究を飛躍的にひき上げ、ファシズムをくい止める有力な武器となると私は信じて疑いない。心からこの大偉業に着手された不二出版に敬意を表したい。

「社会運動通信」は、この時期、各地で数多く発行された

昭和戦前期における 最高の社会運動資料

渡部徹 京都大学名誉教授

「社会運動通信」は、この時期、各地で数多く発行された

社会運動通信

廃刊之辭

弊社發行の「社会運動通信」は昭和初年より今日に至る十有餘年間、通信使命の下、充分ならずとも、其の報道内容を完了するために努力を行ってきた。即ち人民戦線派の喧嘩に對し或は人民戦線的社會主義的解明に努め、又は労働運動の解明に努め、八、九年頃の活動は更に記者が過るまでもなく、効力著しきものがあつた。爲めに資本主義下、企業家側よりは悪言を浴び、當時の編輯部員も亦亦察すに餘りなかつた。滿洲事變以來、時局は轉變して、世界情勢に劇的な變遷を遂げたが、社會主義的労働運動が劇的な姿を現はさねばならぬが、國內機構は異國一致精神に統一されてきた。

弊社は日刊から週刊となつて報道陣を厳守に努め、今日に及んだが、昭和十四年の十一月三十日、加藤利蔵(社長)氏の逝去後は、少限の経営費を以て高難を排しながら社務遂行と共に國民運動を中心とした記事の刷新に努めた。

全圖明徹運動が勃發して日本主義運動が起し、全國津々浦々に旗幟を擡げ、汎ゆる角度から國家大計に即應して、少數なりとも、鳥合之衆、既成政黨たる政、民、社大の抑制へ或は資本主義機構の是正へ、皇道の世界宣布事變に當りては聖戰明徹に貫徹するの活動報告の機關たることを自認し、邪道を排して正義を辯し報道せんとし、今や熱烈に到達するや、上司の命により廢刊の旨に達した。願はるに徹々たる頁ではあつたが昭和十四年

終刊號

十二月以降は皆つての「社通」をして時局の波上に活動計畫あり、其の企圖するもの全く今日水泡に歸したのである。弊社は、この號を以て争闘の歴史を閉鎖することにしようが、廢刊することが「國策の線に沿ふ」ことならば敢て踏まねばならぬ。然るに新體制なるものは偏頗的統制に終つてはならぬ。閣取引を彈壓して閣取引となつてはならぬが如く、國策の常道は正義の道でなくてはならぬ。一もの言へば厚悪し秋の風一であつてはならないのである。合同又は廢刊によつて救はれるものは何であらう。

報國新報と合併し 發展と強力を企圖

自由主義新聞の多い今日、否其勢力は發行部からしても其の比ではないが、勤皇精神を扶植せしめるために帝都の一角に其の名ある報國新報。今次弊社の廢刊に及ぶや、種々多岐の事情を押し進めて合併すべく、而して今後の發展と強力を企圖する。内外陣容を整備することを企圖した。而して編輯部その他にも、新體制に即應、否協力の意味に於て、文章編輯の眞なる新體制を期待するものである。因みに社會運動通信社主として加藤利蔵氏は直ちに報國新報に入社と決定致し、主席の惠谷信氏も編輯入りではないかと思はれる。皇道を見て、皇道に即せず、徒らに文字を弄して其の道に達せざる程罪惡はない愛國を説いて愛國者にあらざる、眞に國を憂ふの軌を逸する等、現世間にあることを思へば、當に黙々として、時の流れに姿を映し、而して生きてよるこの其の使命を全うすべく邁進しなくてはならぬ秋の使命である。

九月十二日(日)

皇道眞理會・再出發

維新翼賛體制の具體化運動

拜啓時局益々多端之折國家大計に則應し官民協力の實踐に邁進する皇國發揚のため慶賀に候

陳者弊社國策の線に沿ひ上司の命に依り「社会運動通信」の終幕に及び候へ共、今後其機會を得度長年月に亘る御後援と御厚情に對し厚く御禮申上候

右簡略卒ら廢刊の御挨拶

皇紀二千六百年 九月十四日

日本社會運動通信社

社主 加藤 康夫
社長 加藤 康夫
社長代理 惠谷 信
社主 加藤 康夫
社長 加藤 康夫
社長代理 惠谷 信
社主 加藤 康夫
社長 加藤 康夫
社長代理 惠谷 信

會式は二月の中に行ふ豫定である。(兵庫縣) 高砂工友會を中心として着々組織運動はすめられつつある。支部の發奮も近い中だ。(熊本縣) 上益城郡に本部を有する青年聯盟も本同盟に加入せんとする。(北海道) 青森縣の空知聯合會が中心になつて有力なる支部組織の運動は起されつつある。

永瀬鐵所争議(埼玉) 埼玉縣北足郡川口町一七三の永瀬鐵所従業員松本次郎氏外二四名は一月十九日左記の如き要求を會になしたるも事業主がこれを拒絶したため遂に一月廿一日罷業を敢行した。

要求事項 一、作業時間を午前七時より五時とす。二、常備賃金を決定せられたし、但し最低二圓五十錢

國際労働會議各代表決定 正式の任命發表は三月末頃

無産婦人同盟第一回 中央執行委員會及常任執行委員會

愛國運動週報 九月十四日午後六時より

社通春秋 九月十四日午後六時より

天旗會活動 大原社を中心とする元報社社員

社会運動通信 全40巻

別冊1

刊行概要

体裁——A4判・B4判(第15巻↓第18巻)クロス装函入

総約二四、〇〇〇頁

内容——一九二八年五月〜一九四〇年九月

解説——渡部 徹

別冊——解説・総目次

記事・地方別索引

全2巻

(これのみ分売可
揃定価5万円)

揃定価——一〇〇万円 (全四十巻・別冊揃価)

配本一覽 (一九八四年六月〜八六年九月 配本完結)

第一回配本——第七巻〜第十巻

昭和5年1月↓6年6月

定価95、000円

第二回配本——第十一巻〜第十四巻

昭和6年7月↓7年6月

定価95、000円

第三回配本——第十五巻〜第十八巻

昭和7年7月↓7年12月

定価95、000円

第四回配本——第十九巻〜第二十二巻

昭和8年

定価95、000円

第五回配本——第二十三巻〜第二十六巻

昭和9年

定価95、000円

第六回配本——第二十七巻〜第三十巻

昭和10年

定価95、000円

第七回配本——第三十一巻〜第三十四巻

昭和11年

定価95、000円

第八回配本——第三十五巻〜第三十八巻

昭和12年

定価95、000円

第九回配本——第三十九・四十巻

昭和13年↓15年9月

定価95、000円

第一・二巻

昭和3年5月↓10月

定価95、000円

第十回配本——第三〜六巻

昭和3年11月↓4年12月

定価95、000円

最終回配本——別冊(全二巻)

解説・総目次／記事・地方別索引

定価50、000円

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

丕出版

東京都文京区向丘一―二―一
TEL〇三―八―二―四四三三
FAX〇三―八―二―四四六四
振替(東京)六一九四〇八四

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。